



野のはな

金城学院大学家政学部
(生活環境学部)

同窓会会報第2号

発行：2003年9月1日

〒461-0011 名古屋市東区白壁4-64
みどり野会館内



「キャンパス事情 あれこれ」

学院長・学長 戸田 安士



「野のはな」に 寄せて

藤城 榮一

今年も、桜前線の北上に伴って、岐阜県根尾村の薄墨桜が見事な花をつけたそうです。一時は、枯死寸前になった桜を蘇らせたのは、弱った古木の根に新しい元気な根を継ぎ足し、踏み固められた土を入れ替えるなどの手入れが効を奏したためだと聞きました。

その話を聞きながら、ここ2、3年、めっきり花のつきが悪くなった、大学構内の一部の桜のことを考えました。粘土質の土が禍して、きっと樹の老化を早めたのでしょう。古いものでも、たった50年しかないはずなのに、老木然とした風情を漂わせ始めているものがあり、心配です。

思えば、昨年度発足をさせた新四学部体制、その一環としての、家政学部の生活環境学部への改組や人間科学部の新設は、古木ならぬ伝統ある本学全体を、新たに蘇らせようとして決断したことでした。そのために、家政学部を愛してやまない先生方や卒業生の皆さんに、どれほどの淋しさを味あわせたことでしょうか。大変、申し訳なく思います。しかし、そのお陰で、相当数の大学で定員割れが起きる今日、本学は、幸い全学部とも、昨年度に続いて今年度も、十分な入学者を迎えることができました。これまでの家政学部や短大の大きな根っこに接木されたからこそと、心から感謝しています。

家政学部は、少なくとも、あと2年間存続しますが、短大は今年の3月、ひとまず、その役割を終えました。それを記念して、W1号館の前に、見事な石像彫刻のモニュメントと記念碑が置かれました。モニュメントは題して「オリオン」、人間科学部の、彫刻家・内田和孝教授の作品です。機会があれば、ぜひ、ご覧になってください。

皆様方の、ますますのご健康とご活躍を祈りつつ。



新しい学部「生活環境学部」が発足して1年が経過しました。初年度に入学した学生の評価が、今後の学部の行方を大きく左右するだけに、この1年間、教職員一同、教育内容の充実と学生指導に力を入れてきました。

それにしても「大学冬の時代」といいますが、今やどの大学も学生確保に必死です。学生に如何に付加価値をつけて社会に送り出すか、その教育の質が大学の評価を決定づけ、受験者数の動向を左右します。それだけに、特に新入生の学生指導には神経をつかってきました。入学式の数日後に実施した蒲郡の某ホテルでの時間制作成を中心とした履修指導と学生同士の仲間づくりを目的とした一泊合宿オリエンテーション、クラス担任を中心とした学生相談・指導体制の強化、学生による授業評価をもとにした教員のFD活動（教育能力開発、授業方法の改善）の強化等々、さまざまな試みを行ってきました。見方によっては、学生追従、過保護という捉え方ができなくもありません。しかし、それが現実なのです。

今までがぬるま湯であったとも言えるのですが、それにしても、ここ数年の教員の肉体的・精神的負担増は大変なものがあります。エリートを教育していた時代とは異なります。中には、不本意入学の学生もいます。パーセント(%)の意味が理解できない学生もいます。授業中に私語をしていても何ら悪びれることのない学生もいます。精神的な悩みを抱える学生も増えています。そうした学生も含めてすべての学生に付加価値をつけて社会に送り出す、その能力が大学教員に求められています。時代の変化、大学の変化を痛感します。能力不足・努力不足を棚にあげて昔を懐かしんでも始まりません。現実には真正面から立ち向かうしかありません。努力が報われることに確信をいだきつつ、「よしっ!」と気合を入れながら、教室に向かうこの頃です。